西村純氏ロングインタビュー 第2回：東北大学時代

高　橋　慶太郎

〈熊本大学大学院自然科学研究科　〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1〉
e-mail: keitaro@sci.kumamoto-u.ac.jp
協力：高橋美和

西村純氏のインタビューの2回目です．前回は少年時代から旧制二高時代までのお話でした．数学や理科が得意な西村氏は「子供の科学」を読んで模型飛行機に夢中になりました．二高の寮では先輩にしごかれながらも自由な雰囲気の高校生活を楽しんだようです．高校卒業後，西村氏は東北大学に入学し，まもなく終戦を迎えます．戦中戦後の大学教育はどのようなものだったのでしょうか．また当時の大学生はどのような生活を送っていたのでしょうか．

●東北大学へ

西村：卒業の前に二高に呼び出されてね．その年，昭和20年だけど，いわゆる大学入試試験をやるかどうかという議論があったんだけれども，なにしろ3月10日の大空襲みたいなのがあってね．とっても入学試験できないっていうわけだよ．ならば今までの経験に基づいて，例えば二高だったら何番くらいの人ならどこそこの大学の何学科に入っていたと．そういうふうに決めるから，みなさん希望の学科を言ってくださいと．成績が何点というのは，みんなこっちでわかるからと．それで大きな教室でみんなに一人ずつ希望を言わせるわけだ．そうするとまあ味もそっけもなく，「あっ君はダメですね」とか，「同じ学科ならどこそこの大学になさったら」とか，「君はどっちでもいいですよ」とかね．ちゃんと言ってくれる．さっぱりしてますよ（笑）．

高橋：それは，全国の高校でそんな感じだったんですか？

西村：ああ，そうです．大学がそうやって採るっていうからね．だからまあしめやかに教員室行って聞くか，それともみんなの前で堂々とやるかの違いだろうね．

高橋：それまでも入学試験がなかったことはあったんですか？

西村：いや，僕のときだけだよ．その前の年まではあった．それは空襲がなかったから．僕のときに本格的な空襲があって，3月10日の大空襲というのがあったでしょ．で，東京が最初にやられたのは前の年の11月ですからね．だから僕の時は空前絶後だね．それで僕はまあ，今までの経緯から考えて航空に行きたいと思っていたんだけれども，航空というのはね，東大がえらい立派なんだよね．それで両親は新聞なんか読んでよく知ってるから，「東京なんて都心に行くのはやめてくれ」と．実際僕の同級生も，東大に入った人は初めはあんまり授業できなかったって言ってるね．みんなすぐに疎開しちゃって．それじゃあしょうがないからというので東北行くかと．でもこれだけ負けが込んでいると，航空やってもちゃんとできるかどうかわからんな，という気がちょっとしたね．それからね，その頃航空を受ける人がものすごく多くなってね．そんなにたくさんいるならま

あ行くことないかってね．それで，まあせっかくなら将来なんでもできるようなね，物理に行くことにしたんです．

高橋： 昭和20年ですよね．じゃあもう負けそうだって気はしてたわけですか？

西村： 終戦の半年前ですからね．なんとなくね．まあとにかく物理やっとけば将来何があってもいいだろうと．そういう浅はかな気持ちで入ったんですよ．

それでともかく二高の寮は出なきゃいけない．米沢の興譲館に頼みに行ったら興譲館の卒業生だから，館長が「まあいいですよ，入ってください」と．それで入ったんです．なかなかいい一部屋をくれて，食堂のわきに火縄銃が置いてあって．そのわきに本が置いてあるんだけど，珍しいことに寺田寅彦全集なんだ．これが実に面白いんだよね．全巻読みましたね．入ってから．

高橋： かなりの量ですよね？

西村： かなりの量だから2, 3カ月かけてね．いや，なるほど面白いものだなと思ってね．あれはかなり教育になったんじゃないかなあ．

高橋： 二高から東北大に行く人は多かったんですか？

西村： 多いですよ．東北大の半分くらいは二高からじゃないかな．いや，もっと多いかもしれない．だって各地に帝国大学ってあるものね．

●旧制高校の文化

高橋： 旧制高校独特の文化としてストームっていうのがありますよね．

西村： 要するに，まあ嵐だよね，だからワーって騒いでわいわいわいわいなんかね，こうダンスするみたいな，ジャンプするみたいなもんだな，抱き合って．要するにフォークダンスみたいなものだな．

高橋： お祭り騒ぎをするということですか？

西村： そういうことです．まあ，エネルギーの発散なんです．

高橋： あと，旧制高校のファッションもありますよね？

西村： ありましたね．だからさ，せっかくきれいなのをしわだらけにして，今ジーパンなんかもそうだけど，無理して地面でこすったりさ，油塗り込んだりして．

高橋： 使い古したのがいいっていうような？

西村： そうでしょう．でね，僕のは先輩がくれたんですよ．マントを着て下駄履くんだけどもさ．あの下駄履くのだって楽じゃない．あれ高いでしょう．するとなんかのはずみで傾くと足くじいちゃうよね（笑）．カランコロンと歩くわけだ．

高橋： 普段からそういう格好なんですか？　授業受けるときなんかも？

西村： いやあそれは違う．まあたまにそういう人もいるけどね．

高橋： どこか出かけるときにですか？

西村： うん，そうそう．それと試肝会ってのがあるんだよ．肝試しっていうんでね，それをやる前に怪談を聞かせるわけだよ，いかにももっともらしい話を．それで十分に怖がらせておいて，夜中に引きずり出して人っ気のない原っぱに行く．お墓があるからそこに名前を書いて帰ってくる．一人ずつ5分おきに出すわけ．で行くとお墓の陰に先輩が隠れていてさ，ギャ〜なんてやるわけだよ（笑）．そういう訓練受けてると，夜中歩いててもどうもないね．やっぱね，訓練ですな．

だからね，旧制高等学校というのは，人によってはせっかく一番頭のいい時期を馬鹿にするためにやってるみたいだ，あれは非常に悪いシステムだと言う人もいるけどね．そうじゃないって人のほうが多いな．

高橋： 先生は，やっぱりああいうのが良かったと？

西村： ああ〜，いいんじゃないかねえ．人間一生にいっぺんくらいはね．どうもねえ，周りの人を見てるとみんな妙なときにアップアップするんだけれども，旧制高校でああいう経験してるとあん

まりそういうことはなくなるね．だけどやっぱりねえ，30歳くらい過ぎると地が出てくるから，まあ結局効き目が10年くらいしかない（笑）．大学に入ったときにね，俗界に戻っちゃうんだな．

●東北大学時代

高橋：高校時代はこのくらいでしょうか．次は大学時代のお話をお願いします．

西村：学年短縮でね，僕の1年上の人は半年前に入ってたんだな．2年上の人は1年前に入っていたわけ．だから物理実験がもうその人たちにオキュパイされててね，われわれは実験できなかったんだよね．初めの1学期は実験がなくて講義だけがありました．そうすると，午後講義が空くわけだよ．実験っていうのはかなり時間取ってて週に4日くらい取ってたんだ．

それで，僕の友達に福田君てのがいるんだけど，それが一緒に興譲館に帰って碁をやろうってんだよね．夜中の12時ぐらいまで打つわけ．2人ともへぼ碁でね．それから勉強してんだから，そんな勉強身に付くわけないんだけど．ところが夏休みの間に彼がうちに帰って．おじさんが碁の先生でドイツに教えに行ってたのが帰ってきたんだよね．それに習ってきたんだよ．するともう全然歯が立たない．だからやっぱりね，先生はいい先生に付かないと駄目だなっていうのがよくわかったよ．でね，先生のレベルに上がるのは非常にたいへんだけど，先生のレベルの少し下までだったら割合簡単に行けるんだよね．

アメリカ見ても優秀な理論物理学者というのは，フェルミの弟子っていうのが非常に多いね．それからファインマンとかね．割合限られてるんだ．ロシアはね，ランダウの弟子が圧倒的．日本は朝永先生の弟子．だからやっぱり偉い先生の下でないとね．どうして偉い先生にはいい弟子ができるかというと，まあいい弟子が寄ってくることもあるんだけれども，非常に複雑で難しいものを考えるときに，どういう風に考えてわかるようにするかという考え方を学ぶんじゃないかね．僕は後になって朝永先生の講義に出ていて何もわからなかったけど，やっぱり見てるとね，非常に複雑なものをモデル化しますね．それで実体的なイメージにしてね．

高橋：なるほど．では大学に入った当初は結構時間を持て余していたんですね．

西村：そうです．まあ勉強すればいくらでもできたんだけど，そうやって時間をつぶしてたんだな．

それから東北大学の物理の先生は，そもそも作ったときには本多光太郎とか石原純とか，愛知敬一とか日下部四郎太とか．これは全部東大から来た先生でね，まあ超一流の先生．殊に影響力が大きく残っているのは本多光太郎で，金属研究所を作ったんですね．だからあそこは物性がものすごく強くなったんですよ．

東北大学の物理の教育方針というのは，かなりその頃のが残ってるんじゃないかな．卒業の単位が4単位なんだよね．今百何十単位だから驚くべきですよ．これはたぶんこの先生たちが決めたんでしょうね．僕は非常にいいことだと思うね．

高橋：じゃあ全然授業とらなくてもいいということなんですか？

西村：いやいや，試験がありますから，ある程度は取らなきゃだめですよ．だけどね，好きなことができる．4単位というのはね，半単位が普通だから今風に言えば8単位だね．そのうち物理実験学というのは1単位なんですよ．それから一般物理学というのも1単位．それから力学と電磁気が半単位ずつで1単位．するとあとは1単位しか残らないの．卒論が1単位あるから，それで終わり．だからあとは好きなことが勉強できる．これは素晴らしいことだね．

それから物理実験というのはゲッチンゲン大学方式というインチキくさいものなんだけど，要するに実験をするとき，普通は実験のやり方を書いた本があってこれに従ってああしてこうしてと手

順がある．しかしその方式では何々をやれとしか書いてないんだよ．具体的にどうやれとは全然書いてないんだ．で，具体的なことは自分で考えろと．どんな方法でもいいと．で，先生が回ってきて，先生が質問するからそれに答えろと．こんなふてえ話ないんだけどね（笑）．だけどこれね，いいんじゃないかなと僕は思うね．手取り足取りああせよこうせよと言うよりは．

高橋：自分でやり方を考えないとできないと．

西村：できない．で，どんな方法でやってもいい．

それでね，当時の先生の面子を見ますと，まず小林巌先生でしょう．それが応用数学，この人かなりレベル高いんじゃないかと思うんだけれど，1950年ぐらいになってからスネッドン（Ian Sneddon）ていう人がね，“Mixed Boundary Problems in Potential Theory”って本を書いて，その中で非常に誉めてるね．いやあ，応用数学でこんなすごい人，僕見たことないな，うん．講義に来てね，一切ノートなんか持って来ないんですよ．サッサッて書いて．それでこう言ってたね，「東北大の数学っていうのは非常にいいんだけれども，あの連中に講義させたら学生の数学のレベルが下がってきた」．だからやっぱりね，工学部と医学部では物理屋がやらなきゃダメなんですよと．で，東北大学は全部この先生がやったんだね，数学を．たまに力学なんかもやってたみたい．

それから，高橋胖って先生は実に変わり者でね，昔の変わり者の大学教授の代表みたいなので．この先生はね，留学の番が回ってくる寸前にラマン散乱っていう，物質にある波長の光を当てるといっぺんにレベルが上がって下に落ちて，入ってきたエネルギー光子よりも短い波長の光が出る，という可能性があるんじゃないかというのに気が付いたんだね．で，それをやろうと思ったらちょうど留学に出る前で，向こうに着いたらやりましょうと．それでスエズ超えて向こうに着いて研究所に着いたら，ちょうど雑誌が来ててそれを見たらラマンがやってたっていうんだよ．だから「君たち，チャンスっていうのは一生にいっぺんしか来ないんだから，留学なんかに関わっちゃだめだよ」って言うんだ．ともかく変人で有名だったね．講義は量子力学なんだけどね，滔々と弁じるんだけれどもう実に詳しいんだ．前期量子論でね，一年間やってまだ前期量子論終わらなかった．

高橋：一年間も前期量子論ですか．相当詳しくやったんですね．授業は面白かったですか？

西村：いやあ面白いけどさ，かなわないんだよ．1時間の予定のところを3時間ぐらい取っちゃうんだよ．まずね，時間どおり来ない．で，もう今日来ないのかなあと思うでしょ，すると30分ぐらい遅れて飄々と現れてね，話出したらもう止まらないんだよ．

それでこの先生が教室主任してたんだけど，誰かが教室主任のハンコをもらいに家まで行った．それで朝9時に行ったらまだ寝ておった．10時になってやっと寝ぼけながら出てきた．「あの先生はだいぶ変だなあ」って言ってたけど，俺も考えてみたらいつの間にかそうなってるんだよね（笑）．

松隈（健彦）先生は相対論の大家でものすごく優秀な先生．物理の中で天文はなんか支店みたいな形になっていてね．イギリスに留学したとき，ディラックと一緒にエディントンから相対論を習ったと言っていた．その前に海軍兵学校の先生か何かしていたんだけれども，ともかく東北大学に来て，いずれ天文教室を作るという話だったのにちっとも作ってくれないって怒っていたね．それから一柳（寿一）さん，これは天文の助教授ね．

●単位を求めて

西村：それでね，さっき話したように4単位必要で，いつ試験をやらなきゃいかんてことないんですよ．こっちが申し出なきゃ先生はやらない．

高橋： それはクラスみんなで申し出るんですか？

西村： うん，それで2年の終わりごろになって，おいそろそろやらんとわれわれ卒業できねえぞという話になったわけ．30人くらいいたけどみんな仲良かったからね，ともかく力学からでも片づけるかっていうわけで，まあまず問題集でも作れってんで，僕と2, 3人が委員に選ばれて問題集作ったんですよ．100題作った．いろんな本から集めて写してきた．そしたらさ，解答もやれって言うわけだよ．でね，解答は書くの面倒くさいから，俺が講義するからみんな聞いてくれって言ってね．100題全部講義したんですよ．その講義がね，今でいう学習塾と同じだね．要するに，こういうパターンのが出たらこう行けと．まあ反射運動だな．ただ解けるってだけで全然学問じゃないんだ．でもあとで気球をやったとき大分役に立った．

高橋： クラスの中で頼りにされてたわけですね．

西村： うん，それで講義してあげたもんだからみんながえらい喜んでくれてね．だから全員パスしましたよ．

高橋： 先生のおかげで．

西村： うん，そうそう．だからみんなそれを覚えてるから今も大事にしてくれるよ（笑）．

高橋： その力学で半単位なわけですね？

西村： うん，半単位．それから一般物理がね，これはまあ本があってそれを持ってる奴と持ってない奴がいて．僕はまあ2, 3日借りて読んだんだけど，何しろ300ページもあると読んでも終わりに来たころにはもう前の方を忘れちゃってる（笑）．だから2回読んだけどさ，もうどうにもこれ以上読んでも意味ないなと思ってね．

高橋： 一般物理というのは，熱力学とかですか？

西村： いや，もうありとあらゆる．力学，熱，電磁気，全部．これだけ覚えていれば何とでもなる．これは本多光太郎が作ったんだね．だから新しい素粒子みたいなのが抜けてるんだけど，それを直して作ったみたいだ．

電磁気学はね，アブラハム・ベッカーとジェームズ・ジーンズの本．ジーンズって知ってる？イギリスの，天文でも活躍した….

高橋： ジーンズ不安定性のジーンズですか？

西村： そう，彼はね，電磁気学の本を書いてて，それもかなり厚い本でね．それもやたら難しい問題があるんだよ．

それでいよいよ卒論になりましてね．僕は本当は原子核だの素粒子だの受けたくて，中林先生のところに行きたかった．いや，本当は実験に行きたかったんだけど実験はみんなつぶれちゃって，物性以外はみんな駄目なんですよ，金研以外は．

それで，松隈先生がぜひ来てくれって僕に言ったんだな．何でそういうことになったかというと，僕が1年生のときかな，戦争が終わってある寒い日に温まろうと思って図書館に行ったんです．その頃天文の人たちは研究室を焼け出されて図書館にいたんですよ．それで図書館に行く階段を上りかけたんだよ．そしたら上から松隈先生が下りてきてね．先生が，「何か用か」って言ったらばさ，用もないのに寒いから来ましたとは言えないから，「ええ」とか何とか言ったら，「じゃあ来いよ」とか言ってね．なんか温かいお茶飲ましてくれてさ，ストーブにもあたって「君用事ってなんだい？」って言うからさ，なんか言わないわけにはいかないでしょうと．それで昔，石原純の本を読んだのを思い出してね，「相対論でかくかくしかじか，ちょっとおかしいような気がします．先生いかがなものでしょうか.」って言ったら，先生はニヤニヤ笑って「面白いなあ，これ」ってね．それで，成相さん，兄貴のほうだと思うけどね，広島にいた．

高橋： 成相秀一さんですね？

西村： そうそう．僕より五つくらい上ですよ．ものすごく優秀な人で，彼は大学院生か何かでそこで勉強してたんだよ．そしたら松隈先生がね，「成相君，今の話聞いてどう思う？」って言ったんだよ．そしたら待ってましたとばかりね，「そ

んなバカみたいなこと，子どもみたいなことを言ってるのは相手できませんよ」と．「全然わかっちゃいませんよ，この人は」とか言って．「いやあプロってのはすげえもんだなあ」と思ってね．ところが松隈先生が「まあまあそう言うなよ，若いんだからさ．君見どころあるからぜひ俺のところに来いよ．」とか言ったんだな．それで「はあ」とか言って．

それでね，松隈先生は一般相対論の講義を持っていて，あるとき冬休みの宿題でシュワルツシルドかなんかから問題出したんですよ．ベクトルやテンソルなんかの．それでね，どうしても解けないんだ．だけどね，ちょっと問題が違っていれば解けるんだ．おかしいなと思って．それで友達と話してたら，「なんか去年の問題と同じの出したらしいね」って友達が言ったんですよ．それで僕ね，「去年の問題ってどんなのだよ」って言ったら，「似てるんだけど，1カ所だけ違うんだよね」と．だから先生が書き間違っていた．結局去年の問題通りなんだ．それで僕は「この問題は間違っているのではないか．もし間違っているとするならば，ここがこう間違っていて，そういう風なら答えはこうである．」と書いたんだな（笑）．それでね，松隈先生のところに恭しく出て行ってさ，「先生この間の宿題ですが，あれは間違っていたのではないでしょうか」って言ったんだ．そしたらね，「いやあ，そんなことはないよ」って言って，「ちょっと待っとれ」と裏へ行ってね，で「ああ，申し訳ないことをした．間違っていた．」と．それで「みんなに言って全部書き直してもういっぺん新しいので解いてくれ」と言ったんですよ．そこで僕はね，「もし間違っているとするならば，こう間違ってるんじゃないかと思って先生のおっしゃるような答えを持ってまいりました」って先生に渡したら「えー」って先生が驚いて．そんなインチキやってるとは知らないからね．もうそれで半単位いただき（笑）．

高橋： 相当優秀な学生に見えた（笑）．

西村： まあ見えたかもしれないね．そんな感じでもう単位なんてあっという間にいっぱいになっちゃって．

高橋： 一般相対論は松隈先生が担当されていたんですね．天文関係の講義はありましたか？

西村： うん．天文学は一柳さん．パララックスって盛んに言ってたんでね，パララックスってあだ名つけて．パララックス先生がとか言って（笑）．

まあ結構ね，東北大学の物理はいいところだったけど，新しい物理を全然教えないからいまだにあんまりよくわからんところがあるんだよね．ある意味では良かったのかもしれないけどね．それと戦争のおかげで実験がやれなかったから，僕はエレクトロニクスを大学のときやらなかった．一般物理実験はやったけどね．あのときエレクトロニクスやってたらずいぶん後で楽だったんじゃないかな．まあ宇宙研で風船やってるときは仕方ないからその少し前に田中靖郎に教えてもらったけど．まあ自己流でやるから，やっぱりそう上等なことはできないね．人の作ったのを直すのぐらいはできるけども．だから，あのとき大学でやっておけばっていうのはドイツ語とエレクトロニクスだね．

高橋： では卒業研究のことを伺ってもいいですか？

西村： はい，僕は本当は素粒子をやりたかったんだ．で，山田光男先生のところに行って，ディラックのReview of Modern Physicsの論文をみんなで輪講する．あと堀伸夫って人が訳したド・ブロイの量子力学の本が白水社かなんかから出ててそれもやったな．それからね，湯川先生の「量子力学序説」っていうのが出たんです．その頃日本に量子論，素粒子論の本ってなかったんだよ．初めて出たんだね．で，始まる前に僕は聞いたんだけども，「卒業論文というのは先生どうなるんですか」って言ったら，「どうせあなたたちが書いたってろくなものが書けるなんて思ってないから要りません」って言うんだよね．だから山田先生は輪

講してればもうタダでくれると．それが一つ．

その次にね，小林先生に頼みに行ったら，「俺のところに来るとはおまえら，なかなか心意気がよろしい．ただし，卒論は試験をやります．」と．で「そんなに易しくない」と．で「おまえらゼット規格だから」，ゼット規格というのは戦中規格でね，「ろくな教育受けとらんからまずダメだろうな．それで良かったら教えてあげるよ．」と（笑）．そういうわけで小林先生は試験受けなきゃいけないからタイミング狙ってたんだけど，あるとき輪読していた先生の応用数学の論文にミスプリがあって，先生はミスプリだと思ってなくて本当に間違ったと思ったらしいんだな．「これは自分の論文で1番いい論文だと思ってた．それに間違いがあったら俺ももう最後だ．」ってね，ふさぎ込んでたんだよ．それで「先生あれはミスプリですよ」って言ったら飛び上がって喜んでね．「本当かっ」とか言ってね．で先生がちょっとチェックしてさ，「あ，本当だ」とか言ってさ．「いやあ，感謝するよ」と．そのときに先生に「卒論ですけど，試験を一つ受けたいと思うんですが，いつがよろしいですか」って言ったらさ，先生喜んでたから試験やるとも言えなくなって，「いや，君たちタダであげるから，他の人には言うなよ」って．だからタダでもらったんだな．だからこの前の松隈先生と一緒でタダだな（笑）．

高橋： じゃあそれで単位を全部取り終わって，卒業ということですか？

西村： そうそう．

●戦時中の東北大学

高橋： 戦争中の大学はどういった雰囲気でしたか？

西村： 東京は大爆撃を受けてましたけど，東北大学の中だけは平和そのもの．

高橋： 先生が入学したのはもう戦争末期ですよね．

西村： だって昭和20年だよ．僕は18年に高校に入って19年に勤労動員に行って，20年に大学入ったんですよ．終戦の年．それで僕の出身の興譲館中学は仙台に宿舎持ってたんですよ．そこに入れてもらってね，通っていたんだけれども．とにかく戦争末期でね，あそこには第二師団てのがあってね，これはガダルカナルに行って全滅まではないけどほとんどいなくなっちゃったんですよ．それで，7月10日だったと思うけどね，仙台で大空襲があったんです．僕はその興譲館の宿舎で監視をやっていたんですよ，みんなで交代で．対空監視所，空を監視する係．ラジオで言うわけだけど，みんな寝てるから危なくなってきたらメガホンで「みんな起きろ」って言うわけだ．その頃にね，東京の3月10日の大空襲に遭ったやつがやってきてさ，「空襲ってのはとんでもないもんだ．もう逃げるしか手はない．水ぶっかける練習なんかしてるより大事なものがあったら穴掘って埋めといたほうがいい．」って言ってたんですよ．それで，僕が対空監視係になった夜にね，B29が1機か2機ね，飛んできたんですよ．警戒警報があったんだけど，仙台の上を飛んで石巻のほうに行っちゃったんだ．でね，鹿島灘から100機，続々北上中と言うんだな．ところが最初の1，2機のB29が仙台の上を通り抜けた途端に警戒警報が解除になっちゃった．

高橋： 結局，何もなかったんですか？

西村： 何もなくて．安心して寝ろっていうわけだ．それでみんな少し安心したときにいきなり猛烈な音がしてね，仙台の東1番地，ど真ん中だね，あそこに太陽のようにピカーッと，要するに照明弾だな，照らしたんですよ．そこに鹿島灘のほうから来た100機が入ってきてね，ダラダラダラって弾落としたんだ．真ん中からやられたんですよ．真ん中にいた人には逃げ遅れた人がずいぶんいる．

高橋： 1回通りすぎて，また戻ってきたということですか？

西村： 石巻に行って戻ってきたやつが照明弾落と

した．そこへB29の100機が南から渦巻状に入ってきて．焼夷弾だな，主にね．死んだ人もたくさんいるんじゃないかな．広瀬川っていうのがあって，われわれは広瀬川の外にいたんだ．郊外だね．仙台の中心からだいぶ離れているから大丈夫だっていう感じだったんだよ．それがとんでもない間違いで，第二師団がすぐそこにあるんですよ．こう回ってきたら第二師団に落とした弾がくるわけ．

高橋：第二師団は狙われるわけですね．

西村：狙ったかもしれない．とにかくわれわれもね，一応は防空壕らしきものを作っていたので，みんな十何人そこに逃げ込んだんだよ．そうしたらね，丁度列車が鉄橋を渡るような音がしてさ．ガラガラガラってものすごい音がしたんですよ．で，飛び出してみたら，庭にじゃがいもが植えてあったんだけど，じゃがいもの葉っぱが全部ロウソクみたいに燃えているんだな．それからわれわれの母屋が火の海ですよ．こりゃあいけねえってんで，こっち来たら敵わないんで，水持ってさ，かけあがって水ぶっかけるんだけど全然ダメですよ．そしたらね，東京大空襲くらったやつが「逃げろ」って言うんだ，おっきな声で．「このままいたらみんな死ぬぞ」って．広瀬川にみんな逃げた．そうしたらさ，ほかにもみんな逃げてきているわけだよ，広瀬川の河原に．そしたらB29が渦巻きになって次から次に来るじゃない．B29が頭の上を通ってさ，爆弾槽開くの見えるんだよな．爆弾がガラガラって降ってくるんだ．ものすごい音立ててね．

それでも僕はね，B29が来ても頼みの日本の戦闘機が飛び立ってアッという間に叩き落とすかと思っていたんだ．けどね，戦闘機なんて1機も出やしない．ないんだよもう．それでも高射砲ぐらい撃つだろうと思っていたら，なんだかB29と関係ないとんでもない方向にポンポンって撃ってるんだ．打ち上げ花火みたいに．第二師団の連中はなんか知らんけど漬物樽か何か担いじゃって，その辺うろうろしていて．第二師団にはそんなに人がいないわけだよもう．そんなに戦況が悪いなんてこっちは知らないから．いや，あんときはもう死ぬんじゃないかなと思ったね．あれ当たったらイチコロですから．隠れる所ないでしょ．もう覚悟決めましたね．

高橋：それはたいへんなご経験でしたね．

西村：それでやっと空襲が終わって，戻ってきたらなんことはない，焼けているのは我々のところだけで，隣近所は全然焼けていないんだ．それから大学に歩いて行ってみたんだ．そうしたら街が焼け野原になっていて．だけどね，何にも感じないね．そういうもんだね，人間てね．

高橋：だいぶ変わり果てていたわけですか．

西村：もうね，仙台駅まで建物ないですから．全部，まわりが見えるわけ．で，大学行ったらさ，赤レンガの立派な物理教室がやられてるんだ．それで林（威）先生っていうX線の先生がね，当時一番若かったかな，そのころ大学を守る担当でね．もう，疎開させにゃって廊下に何か積んであったらしいんだけど全部燃えてて．そんなものは水かけたって消えやしないよもう．結局全部焼けちゃったんだな．赤レンガは残ったけど中は燃えちゃった．呆然としてるんだ，先生．だけどまだ戦争は終わってないですから．「悪いけど君たちね，明日から授業はできないから片付けに来てくれ」と．「授業も若干はやるけど」って．

僕はあのときね，大学の先生というのはものすごくセクショナリズムがあるなと思いました．物理教室がそれだけやられてもね，建物を貸してくれるところがないんだよ．貸してくれてもえらいケチなものしか貸さないんだな．大学の先生てのはケチだなと思ったね．だからあれは反面教師だな．やっぱり人の面倒はみないとだめですよ．

●終戦

高橋：そして終戦ですね．終戦になって，どういう印象をお持ちでしたか？

西村： う～ん，ええとねえ，そう，最初はいささか戸惑ったな．

高橋： 玉音放送はどちらで聞きましたか？

西村： 興譲館の寮にいたんだけども，爆撃食らって一時的に別のところに住んでいたことがあったんですよね．ひと月かふた月くらいなんですが，ちょうどその時期なんですよ．で，多分その日講義があったんだと思うな．

高橋： 8月15日にですか？

西村： うん，ただし11時頃に終わりになって，みんな帰れと．それで仙台の焼け跡をとぼとぼ歩いて，まあ20–30分で帰れたと思う．それで帰って，全員いたかどうかは知らないけど，10人くらいはいたような気がする．でそのときに玉音放送．その2, 3日前から，重大な放送があるっていうんで，十分に徹底されてたね．ところがね，ガーガー言ってまあ1割くらいの人は何言ってるんだかわからなくて，もっと頑張れと言っているに違いないと（笑）．こういう風に取った人もいるらしいね．でも後になって早川（幸男）さんに聞いたらね，早川さんは「もうこれ以上がんばれなんて絶対言うはずないと思った」って言ってたね．

高橋： 音声は聞いてすぐわかりましたか？

西村： うん，僕はわかったね．だから大学から歩いて帰るときにね，ことによるとダメなんじゃないかな…という感じはしてたな．だけどね，冷静だったらあれは絶対だめだと思うのが普通なんだけれど，人間てのはね，そういうときに逆に非常に楽観的に考える癖があるんだね．そこまで追い詰められてもまだね，勝つんじゃないかっていうような一縷の望みは持ってるんだね．

高橋： そうなんですか．7月の空襲でだいぶやられていても？

西村： いやあ，こんなものは戦争やっていれば当たり前だと．ここで粘り抜いて勝たなきゃと．

高橋： 学生同士ではそういう戦争の話とかするんですか？

西村： まあね，二高のとき，少し調子が悪くなってきて，「まさかこのまま負けて，昔日本という国があって最初はえらい景気よく戦争に勝ってたなんていう馬鹿な話になるんじゃないでしょうな」というような話もしたし．それからもうちょっとたってからね，やっぱり二高に来てるような連中は親父がかなりしかるべきポストに就いてる人もいるから，昭和19年くらいかな，まあサイパンが落ちたあたりでね，どうやったら終戦にできるかっていう相談を家でしてるのを知ってるわけだよ．で，「そういうのは実にけしからん」とわれわれは立ち上がってね．打破しなきゃいけないというようなものすごいプロモーションもありましたね．

高橋： 学生のほうがまだ頑張ろうっていう感じですか？

西村： ああ，負けてるなんて思ってないからね．精神がたるんどるっていうの．

高橋： 玉音放送は学生が集まって聞いたんですか？

西村： 興譲館の人たち，まあ学生だね．僕の姉なんて市役所に勤めてたけどね，そのときにインテリで昔ロンドンかどこかに行ってた人が，たまたまそのとき米沢にいたのかな．暇だから手伝いにきてたんだと思うよ．その人が玉音放送が終わった途端に，「あ，負けましたね」って言ったんだって．「まあこれからまた何か考えないとダメですね」って言ったらみんなに睨みつけられたって（笑）．

高橋： 先生ご自身はどうでした？

西村： うーん，いやあやっぱりこんなに酷いことになってたのかなと．まあ虚脱状態だよね．でね，大学はすぐ夏休みに入ったような気がするな．大学もどうしていいかわからないわけだよ．

それで僕は米沢に行ったけど，まああそこは食い物はあるからね．終戦の年はまだ食い物はそれほど酷くなかった．それまで統制取ってたでしょ，その続きですから．一番酷くなったのは次

の年です．東京から仙台にね，食料出してくれと要請があった．仙台のほうがまだ余裕があるから，東京はいずれアメリカ軍が何かしてくれるから，それまでって．ともかくみんな餓死しそうだから．だいたいあのとき1千万人餓死すると言われてたんだよ．それで仙台はくそまじめに出してた（笑）．でも戻ってこないんだよな．で，食う物なくなっちゃったんだよね，仙台．あれは酷かったね．

で，われわれはどうしてるかというとね，もうね，部屋に戻って座って勉強なんかできないんだ，腹減って．すぐ布団にもぐってね，寝て勉強してるわけだよ．床勉と称してね．もう腹が減っちゃってさ，起きてられないんだよ（笑）．だから先生のところに行ってね，「腹減ってどうにもならんから早いところ夏休みにしてくれませんか」って言ったらさ，もう先生は待ってましただよ．先生のほうからそんなこと言えないんだな．先生は立ってしゃべってるからわれわれよりしんどいわけだよね．

高橋： それで夏休みは米沢に帰ったわけですか？

西村： そう．米沢は食い物が豊富だし．それから成田君ていう友達が酒田にいてさ，成田の家はタバコを売ってたんだな．だからタバコは山のように持ってたわけ．配給のね．ともかく煙草も吸えるから，おい来いよと言うんでね（笑）．1週間くらい行ったな，酒田の成田の家に．そしたらね，タバコありませんかなんて買いにくる人がいるけどもちろんないって言うわけよ．僕の泊めてくれた部屋にね，タンスがあって，タンスの中にもういっぱいタバコが詰まってるんだ．それから美人の妹さんがいてね，全部面倒見てくれてたからいい気分だったね（笑）．

高橋： じゃあ夏休みは酒田とか米沢にいて？

西村： そうそう．それでね，大学に入って勉強が遅れててわからないところをなんとかしなきゃってんでね，まあそうねえ，1日に3–4時間くらいずつは勉強してたよね．あれで回復したね．

高橋： 仙台に帰ってきたのはいつ頃なんですか？

西村： 10月だな．

高橋： 10月から大学が始まったんですか？

西村： そうそう．ともかく物理教室が燃えちゃってね，ガラクタがあるからそれを片付けなきゃならんからね．なんかだいぶ片付けに動員されたような気がするよ．要するに瓦礫になっちゃったわけだよ，物理教室がね．

高橋： 普通に授業ができるようになったのは2年生くらいからですか？

西村： いや，1年だってありましたよ，10月くらいから．ただ難しかったけどね．

高橋： そのときはやっぱり食料がなくて？

西村： だから1年2年はもう全然ないですよ．3年になってもなかったけど一番酷かったのは2年じゃないかな．3年になってもなかったね．3年になっても寝床で勉強してたからね．

高橋： 食事は寮で出るわけですか？

西村： そう，買い出しに行ったりね．で，そのうち親父が定年になって引っ込んで．どうしたもんかなと思ったら，二高の明善寮，そこに「僕も入れてくれませんか」って言ったら，どうぞどうぞって．

高橋： じゃあ戻ってきたわけですね，明善寮に．

西村： 半年くらいね．ところがそれがいい加減なもんでさ，そのころ米が配給でしょ．「配給手帳を持ってきましょうか」って言ったら，「いや持ってこなくてもいいよ」って言うんだ．どういうことかっていうと，終戦のどさくさのときにね，なんか仙台の市役所の女の子かなんかをごまかしたのかな，要するにね，幽霊人口だよな．いないやつに米がくる，1人で3人分くらい食ってるわけ．

高橋： 水増しして？

西村： そうそうそう．だからそのときは全然食うには困らなかったんだな．何せ1人で2人半分くらい食ってたんじゃないかなあ．ばれたらえらいこっちゃと思うんだけどね（笑）．闇人口で．そ

の係のやつはね，市役所の女の子に口紅持って行ったりなんかして，うまくごまかしてもらってたんだね（笑）．それから電力制限っていうのがあってね．電気あんまり使わせないんだよね．あんまり使うとね，停電になっちゃうの．そこはね，やっぱり腕のいいのがいてさ，電力メーターのところにちょっと手を入れて，2割しか流れないようにしたりして（笑）．

高橋： 仙台は大きな闇市があったりしたんですよね？　そういうところには行ったんですか？

西村： ああ，あったでしょうね．ぼくはねえ，闇市には行ってないなあ．あ，それからレストランなんかもかなり闇市的だったね．まあどうなってるのか知らんけども，要するにアメリカの軍隊がいて，それの残飯をかき集めて加工して売ってたんじゃないかな（笑）．そういうのもありがたがって食ってたんじゃない．

高橋： 占領軍が街にいるわけですね？

西村： うん．そうするとね，これは面白いんだけどね，終戦になった途端にだよ，アメリカ軍が来るとタバコをみんな取られるかもしれない．だから仙台ではタバコの配給を1年分みんな先渡ししたんですよ，占領軍が来る前に．で，僕は生年月日ごまかしてもらってたんだけどね（笑）．そうしたらさ，みんないい気になって，スカスカスカスカひと月くらいでみんな吸っちゃったわけよ．あんまりうまくないけどね．そこで占領軍が来たでしょ．闇タバコ吸うなって言うほうが無理だよ．でね，最初に覚えた英語がね，“How much the cigarettes?”とかいうんだ（笑）．5ドルだとか10ドルだったかな．値切り方覚えてさ．で吸ってみたらもうね，アメリカ軍が日本のあんなゴミガラみたいなタバコ没収しないですよ．だからいかにピント外れかってこと．

高橋： アメリカのタバコはおいしいわけですか？

西村： いやいやあのころはそれはもう世の中にこんなうまいものがあるのかと思ったね．今吸ったって全然うまくないけどね．

高橋： 占領軍には，占領されてるなという感じはあったんですか？

西村： いやあ，なかったね．あんまりたくさんいなかったんじゃない．それから仙台に来た連中は学徒兵だね．割合インテリですよ．だからわれわれが通ってるとエーイとかなんとか言って話しかけてくる．割合感じが良かったね．

高橋： じゃあそんな別に圧迫感はない？

西村： まあううん，人数少ないからな．東京はやっぱり問題あったかもしれないね．

高橋： 終戦直前に大学に入学されましたが，大学に行くことについてはどうでしたか？　将来研究者を目指そうという思いがあったんですか？

西村： そうだね，あるいはエンジニアね．それはもうだって高等学校入ったら大学行くのは当たり前だもの．昔の高等学校というのは大学のジュニアコースみたいなものだからさ．旧制高校の生徒の数より旧帝大の生徒の数のほうが多いから，必ず入れるわけだよ．

高橋： 一時期は，大学出てもあんまり就職先がないということがあったとか？

西村： いや，そりゃ終戦直後はほとんどないですよ．で，しばらくぶらぶらしているうちに何となくみんなどこかにはまりこんだけどね．で卒業のときに松隈先生が，「いやあ君たちは本当に悪いときに卒業するけども，私のときも不景気で就職口がなくて困ってたね．優秀な人だとちょっと就職口があって，私も優秀だったんじゃないのかな．」なんてね（笑）．松隈先生は海軍兵学校かなんかの先生に行ったから優秀だったんでしょうね．

高橋： 戦中は大学を出たらちゃんと就職先があったわけですか？

西村： 戦争中はもう圧倒的ですよ．軍が黙って採る．もういくら採っても足りない．だからむしろ大学が困ったんですよ，助手の人を採るのに．だから終戦のときに，助手のポストが全部空いてたの．だから終戦の年に卒業したやつは，まずそこ

を埋めたわけ．で次の年，僕の一つ前ね，まだ少し空いてたんだ．それはもうそこで終わり．次の年，われわれの年はもう何もないですよ．会社も景気が悪いから採らないし．

高橋：軍が採っていたというのは，軍の開発をさせるということですか？

西村：そうそう，軍の研究所とかね，いくらでもあるよ．造船所もあるしね．

高橋：じゃ先生の一つ上までは助手の口があって？

西村：あった．まあかなり減ってたけどね．それから戦時中はもう一つ特別大学院というのがあってね，それは言うなれば任期付助手みたいなもの．やっぱり人材をキープしとくためには，デューティーなしの，月給をあげるようなポストが必要だと．軍あたりから申し出があったのかな．それで東北大の物理で1割くらいかな，5パーセントかもしれない．30人いて2人だね．そのくらい月給付きの2, 3年ノーデューティーの特別大学院ってのがあったんだよ．助手よりよけいに金くれるんだ．だから当時大学を卒業して後で大学の先生になるとしたらほとんどそこに入ってるんじゃない？　そのくらい競争が激しかった．でも僕のときはもう戦争終わってますから．その前の年も戦争は終わってたんだけれども続いてあったんですよ．で僕の年は，あるかないかわからなかった．

それでさっき言った高橋先生って変人の先生がいてね，授業が終わったときに僕がね，「先生，われわれもそろそろ卒業ですけど，特別大学院あるんでしょうか，ないんでしょうか．それによって就職口の探し方もありますから．」って組を代表して聞いたんですよ．そしたらね，烈火のごとく怒って，「お前なんていうことを言うんだ．物理学をやって飯を食うなんてとんでもない心がけだ．そんな奴はたとえ特別大学院に来ても，こっちからお払い箱だ．」と言って怒り狂って出て行ったんだよ．いやあもう本当の昔気質の先生だね．そしたら僕の同級生がみんな気の毒がって，「君はみんなが聞きたいことを聞いてくれたのに，あんなに怒られて気の毒だったね」って（笑）．

A Long Interview with Prof. Jun Nishimura［2］

Keitaro Takahashi
Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University, 2–39–1 Kurokami, Kumamoto 860–8555, Japan

Abstract: This is the second article of the series of a long interview with Prof. Jun Nishimura. When he was a boy, he was good at math and science, and got very interested in model airplanes. Also he enjoyed his high-school life in Sendai even in wartime. After graduation, he entered Tohoku University and soon the end of the war came around. How was the university education during and after the war? What were the undergraduate students like?